

## 10/3-9 聖書日課と分かち合い

### 10月3日(月) エズラ2:1-35 捕囚から帰って来た人たち

1 捕らえ移された先から上って来たこの州の人々は次のとおりである。彼らはバビロンの王ネブカドネツアルによってバビロンに連行されたが、それぞれエルサレムとユダにある自分の町に帰った者たちである。2 彼らはゼルバベル、イエシュア、ネヘムヤ、セラヤ、レエラヤ、モルドカイ、ビルシャン、ミスパル、ビグワイ、レフム、バアナと共に帰って来た。

イスラエルの民の男子の数。3 パルオシュの一族二千百七十二人、4 シェファトヤの一族三百七十二人、5 アラの一族七百七十五人、6 パハト・モアブの一族、すなわちイエシュアとヨアブの一族二千八百十二人、7 エラムの一族千二百五十四人、8 ザトの一族九百四十五人、9 ザカイの一族七百六十人、10 バニの一族六百四十二人、11 ベバイの一族六百二十三人、12 アズガドの一族千二百二十二人、13 アドニカムの一族六百六十六人、14 ビグワイの一族二千五十六人、15 アディンの一族四百五十四人、16 アテル、すなわちヒズキヤの一族九十八人、17 ベツァイの一族三百二十三人、18 ヨラの一族百十二人、19 ハシュムの一族二百二十三人、20 ギバルの一族九十五人、21 ベツレヘムの男子百二十三人、22 ネットファの男子五十六人、23 アナトトの男子百二十八人、24 アズマベトの男子四十二人、25 キルヤト・アリムとケフィラとベエロトの男子七百四十三人、26 ラマとゲバの男子六百二十一人、27 ミクマスの男子百二十二人、28 ベテルとアイの男子二百二十三人、29 ネボの男子五十二人、30 マグビシュの一族百五十六人、31 もう一人のエラムの一族千二百五十四人、32 ハリムの一族三百二十人、33 ロド、ハディド、オノの男子七百二十五人、34 エリコの男子三百四十五人、35 セナアの一族三千六百三十人。

ダビデが建国したユダ王国は南北分裂、アッシリア侵攻、バビロン捕囚、ペルシア支配などにより人々は祖国を追われますが、異民族の神々を受け入れることなく、逆境にあっても唯一の神ヤハウェを信じ祈り続け、いつかエルサレムへ帰ることに希望を持ち続けていました。神は、一番相応しくないとされる異教のペルシア王キュロスを用いて、ユダヤ人たちをエルサレムへ帰国させます。解放の預言が成就します。

### 10月4日(火) エズラ2:36-58 捕囚から帰って来た神殿関係者

36 祭司。エダヤの一族、すなわちイエシュアの家族九百七十三人、37 イメル一族千五十二人、38 パシュフルの一族千二百四十七人、39 ハリムの一族千十七人。

40 レビ人。イエシュアとカドミエル、ビヌイ、ホダウヤの一族七十四人。

41 詠唱者。アサフの一族百二十八人。

42 門衛。シャルムの一族、アテルの一族、タルモン一族、アクブ一族、ハティタ一族、ショバイの一族、合計百三十九人。

43 神殿の使用人。ツイハ一族、ハスファ一族、タバオト一族、44 ケロス一族、シアハ一族、パドンの一族、45 レバナ一族、ハガバ一族、アクブ一族、46 ハガブ一族、シャムライ一族、ハナンの一族、47 ギデル一族、ガハル一族、レアヤ一族、48 レツイン一族、ネコダ一族、ガザムの一族、49 ウザ一族、パセア一族、ベサイ一族、50 アスナ一族、メウニム一族、ネフシムの一

族、51 バクブクの一族、ハクファの一族、ハルフルの一族、52 バツルトの一族、メヒダの一族、ハルシャの一族、53 バルコスの一族、シセラの一族、テマの一族、54 ネツィアの一族、ハティファの一族。

55 ソロモンの使用人の一族。ソタイの一族、ソフェレットの一族、ペルダの一族、56 ヤラの一族、ダルコンの一族、ギデルの一族、57 シェファトヤの一族、ハティルの一族、ポケレット・ハツェバイムの一族、アミの一族。

58 神殿の使用人およびソロモンの使用人の一族、合計三百九十二人。

36 祭司。エダヤの一族、すなわちイエシュアの家族九百七十三人、37 イメルの一族千五十二人、38 パシュフルの一族千二百四十七人、39 ハリムの一族千十七人。

40 レビ人。イエシュアとカドミエル、ビヌイ、ホダウヤの一族七十四人。

41 詠唱者。アサフの一族百二十八人。

42 門衛。シャルムの一族、アテルの一族、タルモンの一族、アクブの一族、ハティタの一族、ショバイの一族、合計百三十九人。

43 神殿の使用人。ツイハの一族、ハスファの一族、タバオトの一族、44 ケロスの一族、シアハの一族、パドンの一族、45 レバナの一族、ハガバの一族、アクブの一族、46 ハガブの一族、シャムライの一族、ハナンの一族、47 ギデルの一族、ガハルの一族、レアヤの一族、48 レツィンの一族、ネコダの一族、ガザムの一族、49 ウザの一族、パセアの一族、ベサイの一族、50 アスナの一族、メウニムの一族、ネフシムの一族、51 バクブクの一族、ハクファの一族、ハルフルの一族、52 バツルトの一族、メヒダの一族、ハルシャの一族、53 バルコスの一族、シセラの一族、テマの一族、54 ネツィアの一族、ハティファの一族。

55 ソロモンの使用人の一族。ソタイの一族、ソフェレットの一族、ペルダの一族、56 ヤラの一族、ダルコンの一族、ギデルの一族、57 シェファトヤの一族、ハティルの一族、ポケレット・ハツェバイムの一族、アミの一族。

58 神殿の使用人およびソロモンの使用人の一族、合計三百九十二人。

今日の箇所は氏族別、職業別の帰国者のリストです。エルサレムで神殿を再建する希望を持ち、祭司職に就く者たちを筆頭に神殿関係者が帰国します。度重なる侵略によって破壊しつくされた町、荒廃した神殿を目の当たりにして落胆する者もいるでしょう。でもいつどのような時も主は共にいてくださるということが、私たちを力づけます。

## **10月5日(水) 使徒言行録4:32-37 心と思いを一つにして**

32 信じた人々の群れは心も思いも一つにし、一人として持ち物を自分のものだと言う者はなく、すべてを共有していた。33 使徒たちは、大いなる力をもって主イエスの復活を証しし、皆、人々から非常に好意を持たれていた。34 信者の中には、一人も貧しい人がいなかった。土地や家を持っている人が皆、それを売っては代金を持ち寄り、35 使徒たちの足もとに置き、その金は必要に応じて、おのおのに分配されたからである。36 たとえば、レビ族の人で、使徒たちからバルナバー—「慰めの子」という意味—と呼ばれていた、キプロス島生まれのヨセフも、37 持っていた畑を売り、その代金を持って来て使徒たちの足もとに置いた。32 信じた人々の群れは心も思いも一つにし、一人として持ち物を自分のものだと言う者はなく、すべ

てを共有していた。33 使徒たちは、大いなる力をもって主イエスの復活を証しし、皆、人々から非常に好意を持たれていた。34 信者の中には、一人も貧しい人がいなかった。土地や家を持っている人が皆、それを売っては代金を持ち寄り、35 使徒たちの足もとに置き、その金は必要に応じて、おのおのに分配されたからである。36 たとえば、レビ族の人で、使徒たちからバルナバー—「慰めの子」という意味—と呼ばれていた、キプロス島生まれのヨセフも、37 持っていた畑を売り、その代金を持って来て使徒たちの足もとに置いた。

神によって集められ主から祝福を受けた共同体は、共に祈り合うことによって、神から力を得ます。それぞれの持ちものを共有し助け合うつながりも大切ですが、神と人との霊的な交流によってそこに集う人々の心と思いが共有されていること（コイノニア）が最も大切です。

### **10月6日（木）エズラ2：64-70 神殿再建のための献げ物**

64 会衆の総数は、四万二千三百六十人であった。65 ほかに男女の使用人がいて、それが七千三百三十七人いた。また、男女の詠唱者が二百人いた。66 彼らの馬は七百三十六頭、らばは二百四十五頭、67 らくだは四百三十五頭、ろばは六千七百二十頭であった。

68 エルサレムの主の神殿に着くと、家長の幾人かは、神殿をその場所に再建するために随意の献げ物をささげた。69 彼らはそれぞれ力に応じて工事の会計に金六万一千ドラクメ、銀五千マネ、祭服百着を差し出した。

70 祭司、レビ人、民の一部、詠唱者、門衛、神殿の使用人はそれぞれ自分たちの町に住んだ。イスラエル人は皆それぞれ、自分たちの町に住んだ。

64 会衆の総数は、四万二千三百六十人であった。65 ほかに男女の使用人がいて、それが七千三百三十七人いた。また、男女の詠唱者が二百人いた。66 彼らの馬は七百三十六頭、らばは二百四十五頭、67 らくだは四百三十五頭、ろばは六千七百二十頭であった。

68 エルサレムの主の神殿に着くと、家長の幾人かは、神殿をその場所に再建するために随意の献げ物をささげた。69 彼らはそれぞれ力に応じて工事の会計に金六万一千ドラクメ、銀五千マネ、祭服百着を差し出した。

70 祭司、レビ人、民の一部、詠唱者、門衛、神殿の使用人はそれぞれ自分たちの町に住んだ。イスラエル人は皆それぞれ、自分たちの町に住んだ。

キュロス王の帰還命令に 42,360 人のイスラエルの民が応じました。崩壊したエルサレムの町において、神殿再建という課題を遂行するために、自分たちの能力に応じて献げ物をし、大きな情熱を持って、神殿再建へと取りかかります。神を信じる信仰が再建と復興の道を支える唯一の心の拠り所でした。

## **10月7日（金）詩編 107：1-9 主に贖われた感謝**

- 1 「恵み深い主に感謝せよ  
慈しみはとこしえに」と
- 2 主に贖われた人々は唱えよ。  
主は苦しめる者の手から彼らを贖い
- 3 国々の中から集めてくださった  
東から西から、北から南から。
- 4 彼らは、荒れ野で迷い  
砂漠で人の住む町への道を見失った。
- 5 飢え、渇き、魂は衰え果てた。
- 6 苦難の中から主に助けを求めて叫ぶと  
主は彼らを苦しみから救ってくださった。
- 7 主はまっすぐな道に彼らを導き  
人の住む町に向かわせてくださった。
- 8 主に感謝せよ。主は慈しみ深く  
人の子らに驚くべき御業を成し遂げられる。
- 9 主は渇いた魂を飽かせ  
飢えた魂を良いもので満たしてくださった。

「恵み深い主に感謝せよ」主のみわざに感謝し賛美するようにと私たちが招いています。この歌はイスラエルの民の苦難を描写したもので、人生で直面するさまざまな苦難のとき、『主に助けを求め叫ぶとき良いもので満たされる。』と力強く賛美しています。私たちが真にいやし、望みへと導く道はどこにあるのか、聖書から聴きましょう。主の恵みを単純に出来事として数えるのではなく、主の守りのみ手に支えられて今があることを感謝いたしましょう。

## **10月8日（土）詩編 136：1-26 主の慈しみはとこしえに**

- 1 恵み深い主に感謝せよ。 慈しみはとこしえに。
- 2 神の中の神に感謝せよ。 慈しみはとこしえに。
- 3 主の中の主に感謝せよ。 慈しみはとこしえに。
- 4 ただひとり驚くべき大きな御業を行う方に感謝せよ。 慈しみはとこしえに。
- 5 英知をもって天を造った方に感謝せよ。 慈しみはとこしえに。
- 6 大地を水の上に広げた方に感謝せよ。 慈しみはとこしえに。
- 7 大きな光を造った方に感謝せよ。 慈しみはとこしえに。
- 8 昼をつかさどる太陽を造った方に感謝せよ。 慈しみはとこしえに。
- 9 夜をつかさどる月と星を造った方に感謝せよ。 慈しみはとこしえに。
- 10 エジプトの初子を討った方に感謝せよ。 慈しみはとこしえに。

- 11 イスラエルをそこから導き出した方に感謝せよ。 慈しみはとこしえに。
- 12 力強い手と腕を伸ばして導き出した方に感謝せよ。 慈しみはとこしえに。
- 13 葦の海を二つに分けた方に感謝せよ。 慈しみはとこしえに。
- 14 イスラエルにその中を通らせた方に感謝せよ。 慈しみはとこしえに。
- 15 ファラオとその軍勢を葦の海に投げ込んだ方に感謝せよ。 慈しみはとこしえに。
- 16 イスラエルの民に荒れ野を行かせた方に感謝せよ。 慈しみはとこしえに。
- 17 強大な王たちを討った方に感謝せよ。 慈しみはとこしえに。
- 18 力ある王たちを滅ぼした方に感謝せよ。 慈しみはとこしえに。
- 19 アモリ人の王シホンを滅ぼした方に感謝せよ。 慈しみはとこしえに。
- 20 バシヤンの王オグを滅ぼした方に感謝せよ。 慈しみはとこしえに。
- 21 彼らの土地を嗣業として与えた方に感謝せよ。 慈しみはとこしえに。
- 22 僕イスラエルの嗣業とした方に感謝せよ。 慈しみはとこしえに。
- 23 低くされたわたしたちを御心に留めた方に感謝せよ。 慈しみはとこしえに。
- 24 敵からわたしたちを奪い返した方に感謝せよ。 慈しみはとこしえに。
- 25 すべて肉なるものに糧を与える方に感謝せよ。 慈しみはとこしえに。
- 26 天にいます神に感謝せよ。 慈しみはとこしえに。

この世のすべては主がなさったことで、そこに恵みとあわれみが現れています。万物を備えてくださった神を賛美し、感謝する者となりましょう。私たちは辛いことは忘れないのに、主の恵みはすぐ忘れてしまいます。主の恵みはとこしえに続きます。今、自分が存在していることに感謝し、主の恵みとお守りの中で心豊かに歩んでまいりましょう。

## **10月9日(日) エズラ3：1-13 神殿建設のはじまり**

1 第七の月になって、イスラエルの人々は自分たちの町にいたが、民はエルサレムに集まって一人の人のようになった。2 祭司たち、すなわちヨツァダクの子イエシュアとその兄弟たちは、シェアルティエルの子ゼルバベルとその兄弟たちと共に立ち上がり、イスラエルの神の祭壇を築き、神の人モーセの律法に書き記されているとおり、焼き尽くす献げ物をその上にささげようとした。3 彼らはその地の住民に恐れを抱きながら、その昔の土台の上に祭壇を築き、その上に焼き尽くす献げ物、朝と夕の焼き尽くす献げ物を主にささげた。4 書き記されているとおり仮庵祭を行い、定めに従って日ごとに決められた数を守って日ごとの焼き尽くす献げ物をささげた。5 その後、絶やすことなくささぐべき焼き尽くす献げ物、新月祭、主のすべての聖なる祝祭、主に随意の献げ物をするすべての人のために献げ物をささげた。

6 第七の月の一日に、彼らは主に焼き尽くす献げ物をささげ始めた。しかし、主の神殿の基礎はまだ据えられていなかった。7 彼らは石工と大工に銀貨を支払い、シドン人とティルス人に食べ物と飲み物と油を与え、ペルシア王キュロスの許しを得て、レバノンから海路ヤッファに杉材を運ばせていた。

8 エルサレムの神殿に帰った翌年の第二の月に、シェアルティエルの子ゼルバベルとヨツァダクの子イエシュアは彼らの他の兄弟たち、祭司とレビ人、および捕らわれの地からエルサレムに帰って来たすべての人

と共に仕事に取りかかり、二十歳以上のレビ人を主の神殿の工事の指揮に当たらせた。9 イエシュアもその子らと兄弟たち、カドミエルとその子ら、ホダウヤの子らと一緒にあって、神殿の工事に携わる者を指揮することとなった。ヘナダドの子ら、およびその子らと兄弟たち、レビ人も同様であった。

10 建築作業に取りかかった者たちが神殿の基礎を据えると、祭服を身に着け、ラツパを持った祭司と、シンバルを持ったアサフの子らであるレビ人が立って、イスラエルの王ダビデの定めに従って主を賛美した。11 彼らも「主は恵み深く、イスラエルに対する慈しみはとこしえに」と唱和して、主を賛美し、感謝した。主の神殿の基礎が据えられたので、民も皆、主を賛美し大きな叫び声をあげた。12 昔の神殿を見たことのある多くの年取った祭司、レビ人、家長たちは、この神殿の基礎が据えられるのを見て大声をあげて泣き、また多くの者が喜びの叫び声をあげた。13 人々は喜びの叫び声と民の泣く声を識別することができなかった。民の叫び声は非常に大きく、遠くまで響いたからである。

イスラエルの民がエルサレムへ帰ってきて最初に行ったことは、朝夕の祭儀を執り行う祭壇を築くことでした。その後、神殿の土台が据えられたとき、祭司たちは礼服をまといラツパを手にし、レビ人達はシンバルを手にし、神を讃える歌を賛美しました。「神に感謝せよ。恵み深く、その慈しみはとこしえに」ハレルヤの歓喜の賛美は声高らかに響き渡りました。

(担当 : N.U.)